

## 様式第 2 (第12条関係)

## 加入国際学術団体に関する調査票

## 1 国際学術団体活動状況 (内規第 11 条 活動報告)

団体名	和	国際生理科学学会連合
	英	International Union of Physiological Sciences (略称 IUPS)
	団体 HP (URL)	http://www.iups.org/ (日本学術会議が加盟していることの記載 <input checked="" type="checkbox"/> 有 ・ 無 )
国際学術団体における最近のトピックについて (学術の進歩、当該団体の推進体制の変化、国際機関・政府・社会との関わり方等)	IUPS では、2017 年 8 月の IUPS ブラジル大会に向け、Rhythm of Life をテーマに講演、シンポジウムにノーベル賞受賞者をはじめ、トップレベルの研究者を集め、充実を図っている。イメージングサイエンスの著しい進展、生体医工学や細胞工学の医療・創薬への応用、Organ on chip による薬効評価の加速化、医療現場での Big data の利用、シミュレーション科学の導入など医理工学の連携が研究とその応用における新たな潮流となっている。米国の Brain Initiative、EU の Human Brain Project、我が国の脳プロ、革新脳研究など国際的な大型脳研究が各国で国家プロジェクトとして推進され、2016 年の G サイエンスでも国際連携による研究推進が強調された。	
政策提言や世界の潮流になりそうな研究テーマ・研究方式・研究助成方式等について	生体をシステムとして捉えた機能関連研究、脳の全回路を明らかにするコネクトーム研究、機能とシミュレーションから生理機能を理解するフィジオーム研究、EU 各国が関与する Human Brain Project など、国際協力で大きなテーマに取り組む研究方式が増える。データベースの共有、ビックデータ解析、イメージング研究などで、特に進展が期待され、ヒトゲノム研究に続き、国際連携が推進されている。	
日本人役員によるイニシアティブ事項や日本からの参加によって進展や成果があったものについて	2013 年大会において IUPS 分科会の御子柴委員長が IUPS の Executive committee member に選出された。また、2015 年 7 月開催の IUPS2017 大会プログラム委員会に IUPS 理事の御子柴委員長と井上隆司 Commission Chair が出席し、大会における講演者の選定について検討した。その後の選考で、我が国から Plenary Lecturer 1 名、Keynote Lecturer 2 名が選出された。	
加入していることによる日本学術会議、学会、日本国民への効果やメリットについて	IUPS は生理科学領域、即ち、循環学、呼吸学、内分泌学、神経科学、薬理学、医用工学、比較生理学、体力学、栄養学などを包括する生体の生理機能研究領域の唯一の国際学術団体であり、米国 National Academy、英国 Royal Society をはじめとする主要各国のアカデミー、生理科学学会など加盟している団体である。このため、IUPS への参加により、生理科学の様々な領域における最新の研究成果を国内研究者へ還元すると共に、IUPS を介して我が国の生理科学領域の成果を世界に発信する重要なルートとなっている。また、若手研究者の国際化を促し意識の向上に貢献する。IUPS の起源となる国際生理科学学会は 1889 年に創設され、我が国は 1953 年の国際ユニオンの設立国である。我が国は、加盟国の中で第 2 位の分担金額を負担し、IUPS の運営において指導的な立場が維持されている。これまで、日本人が	

## 様式第2 (第12条関係)

	IUPS 会長を歴任し、現在も Executive committee member や IUPS2017 に 2 名のプログラム委員が選出されている。IUPS はアジア・オセアニア生理科学連合などの傘下の地域連合の活動を支援している。これまで IUPS のアジア・オセアニア地域会議の会長や副会長などが日本から選出され、学術ばかりでなく人的な国際交流において同地域における先導的な立場が維持されている。そのため、日本生理学会大会に欧州やアジア・オセアニア各国からの数多くの研究者の参加があり、我が国における若手研究者の活発な国際交流が推進されている。生理科学研究者の地域連合間の交流は非常に活発であり、留学生の増大に貢献し、国際連携を推進する日本学術会議へのメリットとなる。
その他 (若手研究者・女性研究者育成法、科学者の倫理に関する当該国際学術団体の基本方針や憲章、資金提供ソースの発掘における画期的な方策等の特記事項など)	アジア・オセアニア地域会議である FAOPS では、日本生理学会がアジア・オセアニア地域での生理学研究における指導的立場として活躍していることから、生理学教育を重視し、大会開催年に Inter-Medical School Physiology Quiz を共催し、教育普及を務めており、生理学研究の人材育成に積極的に携わっている。2016 年には日本で Physiology Quiz を行い、教育と国際連携を目指す。

## 2 今後の予定について (内規第 11 条 活動報告)

総会、理事会の日本開催の予定について (招致等の予定も含め)	2019 年 3 月 FAOPS アジア・オセアニア生理学会連合大会、理事会、総会 (神戸)
日本人の役員立候補等の予定について	2017 年の理事改選に向け、我が国からの候補者を推薦する予定。
現在、検討中の日本からの提言や推進するプロジェクト等の動きについて	FAOPS2019 年大会への支援。 日中、日韓のジョイントシンポジウムを日本生理学会大会で開催し、両国における生理学領域のさらなる連携を図る。日本生理学会の会員が、2016 年 9 月開催の中国生理学会主催の国際生理学会において基調講演および日中ジョイントシンポジウムでの講演、12 月開催予定のオーストラリア生理学会における日豪ジョイントシンポジウムでの講演を行う予定である。

## 3 国際学術団体会議開催状況 (内規第 11 条 活動報告)

総会・理事会・各種委員会等の状況 (過去)	総会開催状況	2013 年 (開催地: バーミンガム/英国)、2009 年 (開催地: 京都)、2005 年 (開催地: サンディエゴ/米国)、2001 年 (開催地: クライストチャーチ/ニュージーランド)
	理事会・役員会等開催状況	2013 年 (開催地: バーミンガム)、2013 年 (開催地: バーミンガム)、2011 年 (開催地: オックスフォード) 2007 年 (開催地: 京都)、2005 年 (開催地: サンディエゴ)、

## 様式第2 (第12条関係)

5年間及び今後予定されているもの)	各種委員会開催状況	2015年(開催地:アグアスデリンドイア/ブラジル) 2013年(開催地:バーミンガム)、2011年(開催地:バーミンガム)、 2007年(開催地:京都)、2006年(開催地:大阪)、 2003年(開催地:ワシントンDC)、		
	研究集会・会議等開催状況	2015年(開催地:バンコク, 8thFAOPS)、2011年(開催地:台北, 7thFAOPS) 2015年(開催地:カウナス, FEPS 会議)、 2014年(開催地:ブタペスト, FEPS 会議) 2007年(開催地:ブラチスラバ, FEPS 会議) 2006年(開催地:ソウル, 6thFAOPS)		
上記会議等への日本人の参加・出席状況及び予定		2015年 IUPS プログラム委員会(アグアスデリンドイア/ブラジル) 2人(うち代表派遣:御子柴克彦) 2015年 FAOPS 会議(バンコク) 130人 2013年 IUPS 大会(バーミンガム) 205人、IUPS 理事会1人、IUPS 総会代議員5名 2011年 FAOPS 会議(台北) 102人 2009年 IUPS 大会(京都) 2251人(学術会議共催)		
国際学術団体における日本人の役員等への就任状況(過去5年)	役職名	役職就任期間	氏名	会員、連携会員の別
	2 <sup>nd</sup> Vice President of FAOPS	2015~2019	久保 義弘	(23期) 会員・連携 特任連携
	Council member	2013~2017	御子柴 克彦	(22・23期) 会員・連携
	1 <sup>st</sup> Vice President	2009~2013	倉智 嘉久	(21・22期) 会員・連携
	President of FAOPS	2006~2011	岡田 泰伸	(22・23期) 会員・連携
		~		( ) 期) 会員・連携
出版物	1 定期的(年6回) 主な出版物名 Physiology 2 不定期( ) 主な出版物名			
活動状況が分かる年次報告等があれば添付又は URL を記載 ( <a href="http://www.iups.org/reports/annual-reports/">http://www.iups.org/reports/annual-reports/</a> )				

## 様式第2 (第12条関係)

## 4 国際学術団体に関する基礎的事項 (内規第3条、4条、5条)

国内 委員 会 (内 規4 条第 3 号)	委員会名	IUPS 分科会
	委員長名	御子柴克彦
	当期の活動状況	(開催日時 主な審議事項等) 2014. 12. 1 (メール審議) 役員を選出、特任連携会員の申請 2015. 3. 22 (神戸) 23 期活動方針検討、IUPS2017 年大会プログラム委員会対応について検討 2015. 6. 15 (メール審議) IUPS2017 講演者推薦に関する協議 2015. 6. 16 (メール会議) IUPS 財務担当への年会費支払いの問合せ 2015. 8. 20 (メール会議) ブラジルにおけるプログラム委員会報告と IUPS2017 年大会 Lecturer 推薦についての検討 2016. 3. 23 (札幌) IUPS2017 年大会シンポジウム応募の検討
内 規 第 3 条 (国 際 学 術 団 体 の 要 件 関 係)	国際学術交流を目的とする非政府的かつ非営利的団体である <input checked="" type="radio"/> 1. 該当する      2. 該当しない ※根拠となる定款・規程等の添付又は URL を記載 ( <a href="http://www.iups.org/about-us/constitution-and-bylaws/">http://www.iups.org/about-us/constitution-and-bylaws/</a> )	
	各国の公的学術機関及び学術研究団体等が国際学術団体に国を代表する資格を有して加入するものが、主たる構成員となっている (主たる構成員が、いわゆる「国家会員」であるか否か) <input checked="" type="radio"/> 1. 該当する      2. 該当しない ※根拠となる資料の添付又は URL を記載 ( <a href="http://www.iups.org/member-societies/adhering-bodies/">http://www.iups.org/member-societies/adhering-bodies/</a> )	
	下記の事項 (ア～エ) のいずれか一つに該当するか (該当するものに○印)	
	ア 個々の学術の専門分野における統一かつ世界的な組織を有するもの	
	イ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、統一かつ世界的な組織を有するもの	
	<input checked="" type="radio"/> ウ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、ア又はイの国際学術団体を連合した世界的組織を有するもの	
エ 構成員のうち、各国代表会員がアジア地域等我が国が関係する地域等に限られるものであって、当該国際学術団体の研究の領域が複数の専門分野にわたるもの		
10 ヶ国を超える各国代表会員が加入している <input checked="" type="radio"/> 1. 該当する      2. 該当しない		
加入国数及び 主要な各国代 表会員を 10 記載	( 50 ヶ国) ・各国代表会員名/国名 Denis Noble /UK,                      Walter Boron/USA, Julie Chan/Tiwan,                      Peter Hunter/New Zealand,	

## 様式第 2 (第12条関係)

		Carlo Reggiani/Italy, Penny Hansen/Canada , Benedito Machado/Brasil Caroline McMillen/Australia, Jens Retting/Germany, Xiaomin Wang/China
--	--	---